



これまでの主な活動範囲

アジア:モンゴル 中国(雲南・チベット) マレーシア インド ネパール ブータン
アフリカ:アルジェリア スーダン ギニア シエラレオネ ガボン ウガンダ マダガスカル



それぞれの動物は、進化の中で食性に応じた消化器官と消化機能を持つようになっており、草食動物と肉食動物では、食べ物が全く違うため、それに応じて消化器の大きさや形態、その中に住みつく共生腸内細菌が違っています。反芻目のウシを食肉目のイヌのエサで飼うことはできませんが、食肉目でもクマは、小腸を長くすることで雑食化に適応して植物性食物を大量に食べることができるようになっています。さらに進んだパンダでは竹しか食わずに暮らしています。草食動物でも、反芻目のキリンでは、ウシの食べる高繊維低タンパク質の草原の草よりも低繊維高タンパク質のマメ科樹木の葉などを食べて暮らしているため、ウシのエサで飼育することは困難です。

我々は動物の食性とそれに適応した栄養生理と共生腸内細菌にもとづいた飼料や生菌剤の開発を目指しており、また、野生動物の持つ有用な性質に着目しプロバイオティクスを開発し、希少動物の保全に役立つ腸内細菌研究を行なっています。その成果は類縁の家畜種やペットなどの保健にも役立つと期待されています。

【研究テーマ】

- 絶滅危惧種ニホンライチョウの保全研究(環境省と連携)
- 絶滅危惧種コンゴヨウムの保全研究 (JICA草の根プロジェクト)
- ゴリラ、チンパンジー、ムササビ、ニホンライチョウなど葉食/果実食動物の消化生理と共生腸内細菌の研究
- トラヤライオン、カワウソ、アフリカハゲコウ、ヤモリ類など肉食動物の消化生理と共生腸内細菌の研究
- アオミガメなど海産草食動物の消化生理と共生腸内細菌の研究
- 魚類の消化生理と共生腸内細菌の研究

キーワード

動物、飼料開発 腸内細菌、プロバイオ、保健衛生、野生動物保護

相談に応じられる内容

陸生および海産動物の飼料開発、消化生理、腸内細菌研究、プロバイオティクス開発、微生物機能解析、野生動物保護